

# オンラインによる国語の定期試験は成立しうるか

## —令和3年度期末課題に対する学生の意識調査から—

Is it possible to have regular Japanese language exams on the web?  
Report on the results of the student awareness survey on the final assignment for the 3rd year of  
Reiwa

高橋 宏宣・廣瀬 航也\*

福島工業高等専門学校 一般教科

\*福島工業高等専門学校 一般教科

TAKAHASHI Hironobu and HIROSE Koya \*

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

\* National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2022年9月5日受理)

The coronavirus continues to upend the lives of people around the world. It is widely acknowledged that the spread of infection has had a significant impact on people's lives, and that the loss of educational opportunities has damaged children's opportunities for intellectual and physical growth. In 2021, due to the spread of COVID-19, the final exams for the second semester could not be held. The authors, who were no longer able to evaluate their academic ability on tests as before, were forced to update their common sense. This paper examines this experience through student questionnaires, and considers the possibilities and challenges of digitizing evaluation methods in the subject of Japanese.

**Key words:** regular Japanese language exams, digitizing evaluation methods, student questionnaires

### 1. 緒言

2020（令和2）年から世界を覆うコロナウイルスは、変異を重ねることで各国の国民生活を翻弄し続けている。本稿執筆時である2022年8月末現在、日本国内の累計感染者は1800万人を超え、単純計算で日本人のおよそ7人にひとりが感染を経験したことになる。繰り返す感染の拡大と沈静化が国民生活に与える影響は甚大で、将来社会にどのような変化がもたらされるかは歴史の審判を待たねばならないとしても、中期的にみて、休校や行事のとりやめによる教育機会の損失が子供たちの知的・身体的成長の機会を毀損したことは衆目の認めるところだろう。中等・高等教育の授業に関連することに限ってみても、対面授業から遠隔授業への急な移行と授業内容の変更を余儀なくされただけでなく、定期試験を従前のようには実施できないといった評価の問題まで実に幅広い領域で従来の常識が通用しない局面に立たされた。

福島高専のこの2年をふり返ってみても、2020（令和2）年度は通算8週にわたる休校により、Microsoft Teams

（以下 Teams と略記）を使ったオンライン授業を強いられた。学生も教員も初めて Teams を使う者が多く、手探りの一年だった。翌2021（令和3）年度は感染抑制に留意しつつ対面授業を維持できたが、コロナ感染拡大のタイミングにより、前期・後期ともに期末試験を実施できなかった。対面からオンラインに授業が切り替わったときも戸惑ったが、学生が登校できないため定期試験が実施できず、オンライン上で課題の提示から採点、評価まで完結しなければならなくなったときもおおいに戸惑った。

「制限時間内に手で解答用紙に文字を書く」ことが国語という教科における正当な学力の評価方法と疑いなく思ってきた稿者たちは、コロナ禍によりはからずも自分たちの常識を更新する必要に迫られたわけだが、この経験を報告するとともに、オンラインで課題を課された学生側の意識をアンケートによって検証することで、国語という教科における評価方法のデジタル化の可能性と課題について考えてみたい。

## 2. 2021 (令和3) 年度の定期試験

### 2.1 休校により期末試験が実施できなかった経緯

2020 (令和2) 年度は休校により前期の授業に大きな混乱が生じ、中間試験 (6月) は実施できたが、期末試験 (7・8月) は実施できなかった。後期は、たび重なるスケジュール変更により学生に過大な負担がかかっていることに配慮して中間試験 (11月) が取りやめになったものの、後期の期末試験 (2月) は予定どおり実施できた。福島高専の中間試験は教務の規定上授業時間のひとつとして扱われ、実施しない科目もある<sup>1)</sup>。期末試験が実施できれば成績評価はさほど困難ではなかった。

一方、2021 (令和3) 年度は、ウイルス感染拡大の時期が前期・後期ともに期末試験の実施時期に重なり、前期・後期とも中間試験は実施できたが、期末試験はいずれも実施できない状況に陥った。その経緯を以下で簡潔にまとめておく。

### 2.2 前期：期末試験から課題への変更

当初期末試験は7月28日 (水) から8月3日 (火) までであったが、直前に寮生のウイルス感染が判明し、7月26日 (月) から休校措置がとられた。期末試験に代わって遠隔授業を行い、試験は夏休み明けの9月に延期された。しかし、その後いわき市がまん延防止等重点措置対象区域となり、開寮時期が9月下旬の見込みとなったため、日程的に期末試験を実施することは困難となり、本科生の試験は全科目代替となる課題の提出をもって試験に代えることになった。

高橋・廣瀬ともに、Teams上に課題 (期末試験で実施予定だった問題用紙と解答用紙) をアップロードし、学生がそれを印刷して解答を書き込み、登校後教員に提出することにした。

### 2.3 後期：期末試験からオンラインでの課題提出に変更

2022 (令和4) 年1月に入ると、いわき市内でふたたびウイルス感染が拡大した。学年末にあたって授業時間の確保 (30週分) と成績評価を滞りなく行うため、当初の予定では期末試験後に行われる最終週の授業を前倒しで実施し、期末試験は前期同様課題に振り替えることが決まった。いつ休校になっても学生に混乱が生じないよう、事前に学生に課題について周知するよう教務委員会から連絡がなされた。

その後、いわき市にまん延防止等重点措置が発令される見通しとなったため、1月26日 (水) から休校となり、学年末まで学生が登校できない事態となった。

## 3. 後期期末課題への対応 (1年「国語」)

### 3.1 オンラインで実施することの困難

前期期末課題は学生が提出した解答用紙を採点・返却することができた。しかし、後期期末課題は、学生が登校できないなか、限られた期間内に回収と採点を行わなければならないなかった。ここに困難があった。前期同様、実質的には試験問題である課題を Teams 上にアップロードして学生に解答させる方法が望ましい。問題は採点だった。自筆で解答した用紙を写真に撮り Teams 上にアップロードさせ、教員がそれを印刷して採点する方法もあったし、Microsoft Forms (以下 Forms と略記) で解答のフォームを作成し、Teams とリンクさせて Web 上で採点するという方法も考えられた。しかし、漢字や語彙、読解問題合わせて 40~60 問ある解答を写真の印刷や Web 経由で採点するのは、教員側の負担が大きい。実は効率的でよい方法があったのかもしれないが、学生への周知期間が短いなか、他の方法を模索する時間的余裕はなかった。オンラインで課題の提出を学生にさせたことはそれまでであったが、細かい採点が必要な課題ではなかったため、学生にとっても教員にとっても経験したことのない評価方法となる。そのためには事前に学生とのあいだで十分な意思疎通をはかる必要があるが、そうした時間もなかった。

1年生の「国語」を担当していた高橋と廣瀬は、オンラインで実施可能な採点方法を検討し、漢字や語彙、記号選択の問題をなくし、記述式の解答だけの課題を作成することにした。本校国語科は学生の文章作成能力を向上させることを主眼とした教育課程を実施しており、それとの整合性からも記述式の問題に絞ったほうが学生の評価方法にかなっていると判断したためである。

問題は Forms で作成し、Teams の「課題」にリンクさせた。高橋と廣瀬で授業内容が異なることから、それぞれ別の課題を作成し、あわせて学生へのアンケートも行い、今後の参考とすることにした。

### 3.2 高橋の課題と実施方法

高橋の担当クラスは機械システム工学科1年生 (以下 1M と略記) 41名である。休校決定後、学生が登校できなくなる前に Teams で以下のことを連絡した。

- ①教科書・ワークをかならず持ち帰る。
- ②課題は教科書・ワークをみて解答してよい。
- ③30点満点とする。(後期の成績は、中間テスト30点、期末課題30点、漢字テスト・平常点40点で評価する)
- ④1月26日 (水) 以降の遠隔授業時間内に課題に取

り組み、質問があればその場で対応する。



Fig.1 Teams による学生への連絡画面

Teams の「課題」は Forms とリンクできるよう設計されており、教員は学生が各自のパソコン等から入力した解答を Forms 上で採点できる。結果は即座にフィードバックされ、学生が採点結果を確認できる仕組みになっている。

課題の問題は次の通りである。

Table 1 1M 期末課題問題

問一 10 点	「無痛化する社会のゆくえ」(森岡正博)で、筆者はどのような意味で「無痛化」という言葉を用いているか説明し、その問題点についても指摘しなさい。
問二 5 点	「浪費を妨げる社会」(國分功一郎)で、「消費社会を批判するためのスローガンを考えるとすれば、それは『贅沢をさせろ』になるだろう」(P92・16 行目)とあるが、筆者はなぜそのように言っているのか説明しなさい。目安は1000字程度とする。
問三 各 5 点	古文(「花は盛りに」/『徒然草』)を読み、後の問に答えなさい。(問題文の PDF ファイルは別に掲示) 問 傍線部①(「かたくななる人」とあるが、筆者は具体的にどのような人をこのように言っているのか説明しなさい。 問 傍線部②(「色好むとは言はめ」とあるが、筆者は本文中でどのような人を恋の情趣のわかる人と言っているのか説明しなさい。 問 傍線部③(「都恋しう覚ゆれ」とあるが、筆者はどのようなときに都が恋しく思

	われるのか説明しなさい。
--	--------------

使用教科書：『改訂版国語総合 現代文編』(数研出版)

『改訂版国語総合 古典編』(数研出版)

### 3.3 廣瀬の課題と実施方法

廣瀬の担当する1年生のクラスは、電気電子システム工学科(以下1Eと略記)42名、化学・バイオ工学科(以下1Cと略記)41名、都市システム工学科(以下1Tと略記)41名、ビジネスコミュニケーション学科(以下1Bと略記)38名である。

廣瀬も高橋と同様、Teams を用いて学生に連絡した。その際、以下の【注意】と問題を記載した Microsoft Word (以下 Word と略記) ファイルを添付する形で課題の指示を行った。

#### 【注意】

- ①教科書・プリント・ワーク・辞書等を参照して良い。ただし、(調べることも含めて)自分の力で解答すること。
- ②解答は Teams の「課題」機能より、Forms を用いて提出すること。但し、Forms は一度しか「送信」できないように設定してあるため、注意すること。
- ③Forms に入力する前に、誤字脱字や字数の不足等がないよう確認すること。そのため、あらかじめノートもしくはこの Word ファイルに解答を作成してから、Forms に転写すると良い。
- ④課題が提示されたら、期日までならいつ「送信」しても構わない。但し、授業内で課題の説明を行うので、それを踏まえ、解答をよく見直してから「送信」すること。
- ⑤〆切は2月8日(火)12:00とする。
- ⑥わからないことは、積極的に質問すること。但し、解答の正誤は答えられない。

Teams の「課題」機能と Forms の互換性、及びフィードバックにおける利便性は高橋の事例の通りであり、廣瀬も Teams の「課題」機能からリンクされた Forms に入力する方法を採用した。廣瀬が Word ファイルに【注意】と問題をまとめ、アップロードした理由については、【注意】③を参照されたい。期末課題の連絡を行った後、各クラス3~4時間程度オンライン授業の機会が得られたため、課題の内容や【注意】に関する詳細な説明を行い、実際に課題に取り組みせるとともに、適宜質問を受け付けた。課題の問題は次の通りである。

Table 2 1E・1C・1T・1B 期末課題問題

問一 20点	教科書「時間と自由の関係について」を読み、本文全体を100字程度で要約せよ。
問二 20点	教科書「浪費を妨げる社会」を読み、本文全体を100字程度で要約せよ。
問三 20点	教科書「浪費を妨げる社会」を読み、「消費」の具体例を挙げ、それがなぜ「消費」と言えるのかを説明せよ。それを踏まえ、消費社会をどのように生きていけば良いのか、あなたの考えを述べよ。
問四 10点	教科書「鶏口牛後」について、「此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之。況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六国相印乎。」を書き下し文に改めよ。訓点等は、教科書・プリントを参照すること。
問五 10点	教科書「鶏口牛後」について、「此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之。況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六国相印乎。」を現代語訳せよ。訓点等は、教科書・プリントを参照すること。
問六 20点	教科書「鶏口牛後」を読み、本文の内容・あらすじを100字程度でまとめよ。
問七 5点	和歌「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」を現代語訳せよ。
問八 5点	和歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」を現代語訳せよ。
問九 5点	和歌「山里は冬ぞさびしきまさりける人目も草もかれぬと思へば」の修辞を説明せよ。
問十 5点	和歌「起きもせず寝もせで夜を明かしては春の物とてながめ暮らしつ」の修辞を説明せよ。
問十一 10点	和歌「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」の修辞や技巧的な点について説明せよ。ただし、文章で丁寧に説明すること。

使用教科書：『改訂版国語総合 現代文編』（数研出版）  
『改訂版国語総合 古典編』（数研出版）

福島高専の1年国語の授業は、工学系4学科（1M・1E・1C・1T）は3単位であるのに対し、文系学科（1B）は4

単位である。そのため、授業の進度や試験範囲にも相違がある。今回の期末課題においても、授業進度に差があったため、1E・1C・1Tには問一～問六（100点満点）、1Bには問三～六の配点を1/2に減じた上で、問一～問十一（100点満点）を出題した。出題に際しては、学生が教科書・ノート等を参照することを前提とし、また3～4時間程度のオンライン授業の時間を十分に利用して取り組むことができるよう、難易度が保証され、かつ表現の自由度が高い記述式の問題を提示した。とはいえ、これまでの授業で要約文や意見文を執筆する機会を十分確保できたとは言えないため、ノートを確認すれば容易に正答できる問題も交えて課題を構成した。期末課題を経て、学生が教科書本文を何度も読み返し、確かな理解を元に、簡潔で他者に伝わる表現で答案を作成できることを目標とした。

#### 4. 期末課題に対する学生の意識（アンケート結果）

##### 4.1 アンケートを実施した経緯

2020（令和2）年に始まったコロナ禍は、対面授業に代わる遠隔授業を学校教育に定着させつつある。コロナ禍以前にリモート形式の授業はあったが、実施しているのは主に塾や予備校だった。ZoomやTeams等のアプリケーションソフトも、存在は知られていても学校で利用されることは多くなかった。それが、コロナ禍で対面授業ができなくなると、遠隔授業の手段として急速に普及し、大学・高専をはじめとする高等教育機関で教員と学生の必須授業アイテムになった。コロナ禍によって期せずして進んだ授業のデジタル化により、福島高専国語科では、授業だけでなく諸連絡や課題の回収もTeamsやFormsで行っている。

とはいえ、定期試験に関しては、出席時一発一括実施というのが学校の常識で、高橋も廣瀬もその考えのもとに成績評価を実施してきた。定期試験が実施できない場合は試験に代わる課題の実施もやむを得ないが、自筆の解答を採点するという認識であり、令和3年前期はそれが辛うじて実現できた。

それができなくなったのが後期期末試験だった。学生は登校できず、限られた時間内に採点を終えねばならない。他校の取り組みや先行する事例も知らない。初めての経験を一時的な試行としてやりやすさすることもできたが、試験のデジタル化を先行して経験する好機でもあった。授業のデジタル化は教育分野で不可避の潮流であり<sup>2)</sup>、いずれ評価方法のデジタル化の波も押し寄せる。2021（令和3）年度のオンラインでの実験的な試行にとどめるの

でなく、定常的に定期試験をオンライン化するのは無理としても、授業中の確認テストや演習の解答にオンライン形式を積極的に取り入れて学生の意欲を高めたり、成績処理の簡便化によって教員の負担を減らしたりすることはできる。高橋と廣瀬で協議し、期末課題終了後に学生にアンケートを行い、学生側の率直な感想をフィードバックして今後の授業改善に役立てることにした。

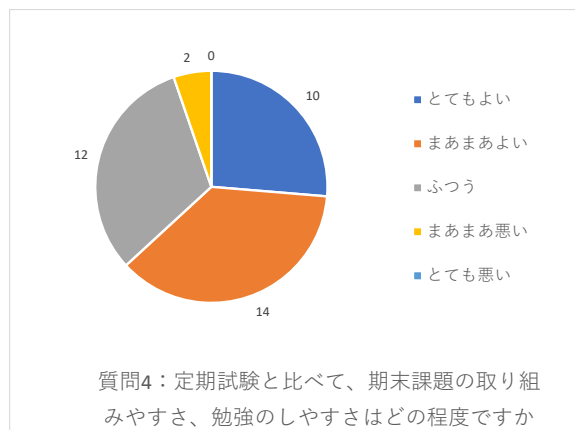
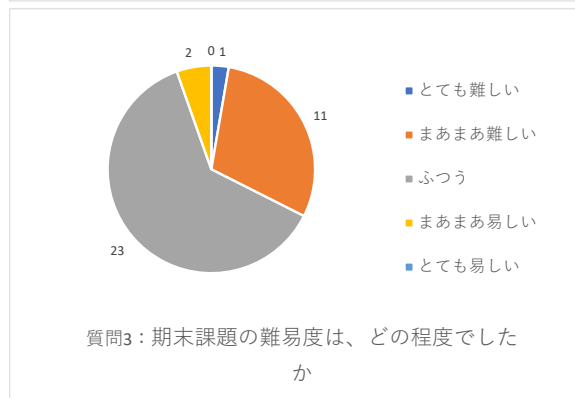
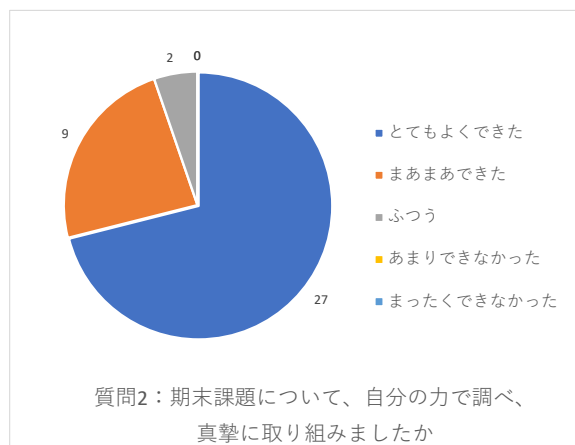
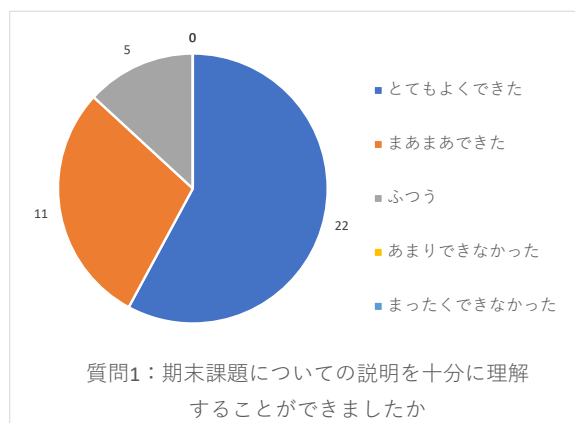
対象学生は、1年生5学科で、学生総数は203名である。以下、Table3で質問項目、Fig.2で高橋担当クラス、Fig.3で廣瀬担当クラスの結果を示した。

Table 3 学生への質問項目

質問1	期末課題についての説明を十分に理解することができましたか。
質問2	期末課題について、自分の力で調べ、真摯に取り組みましたか。
質問3	期末課題の難易度は、どの程度でしたか。ただし、日頃から十分に勉強し、今回の課題も真摯に取り組んだことを前提とします。
質問4	定期試験と比べて、期末課題の取り組みやすさ、勉強のしやすさはどの程度ですか。
質問5	定期試験と比べて、期末課題では自分の実力や勉強の成果をどの程度発揮することができましたか。
質問6	今後もオンライン上で課題や試験を実施することについて、どのように思いますか。
質問7	期末課題とは関係なく、オンライン授業を実施することについて、どのように思いますか。

#### 4.2 高橋のアンケート結果

以下は、高橋担当の1M（在籍41回答数38）のアンケート結果である。



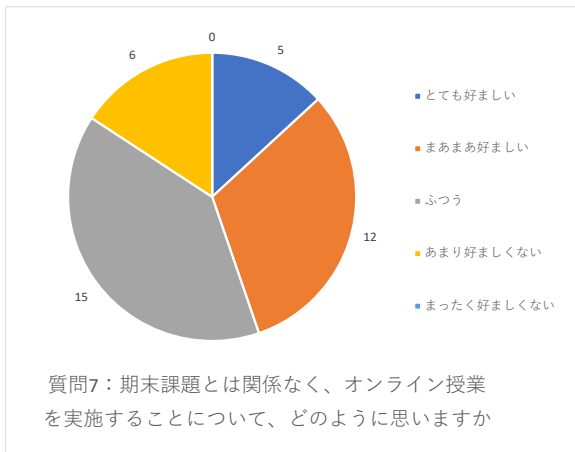
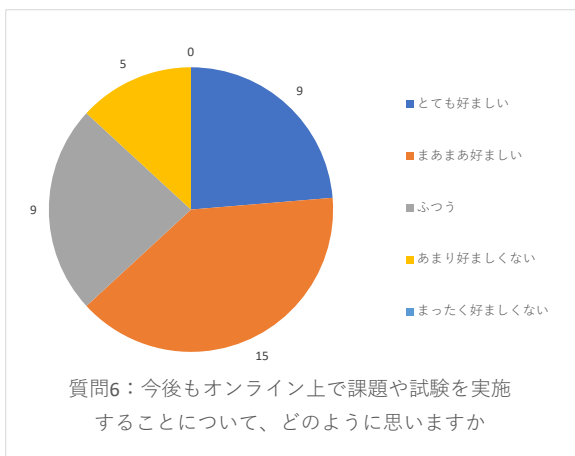
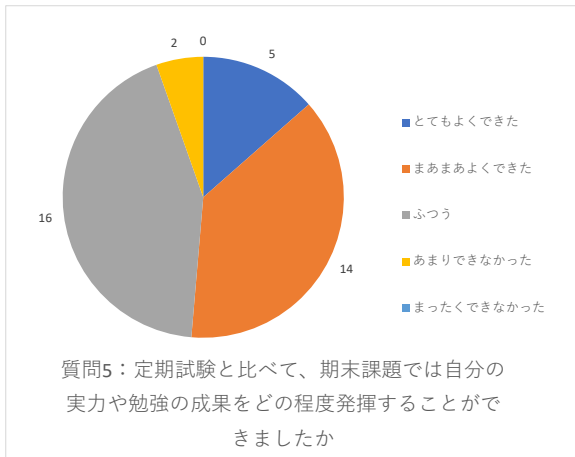


Fig.2 高橋担当 1Mのアンケート結果

期末課題の詳細は Teams で連絡した。1 年生は高専入学後に Teams を使い始め、令和 3 年度は遠隔授業が少なかったため Teams を利用する機会も減り、学生が使いこなせるか懸念していた。しかし、質問 1 の回答をみると杞憂であったようだ。全員がスマートフォンを所持し、デジタルデバイスの使用になれている学生たちに対して

は、連絡のオンライン化はまったく問題ないようだ。

課題への取り組みは Teams による遠隔授業の時間内（時間割どおり）に行うよう学生に指示した。質問があればオンラインで受け付けた。課題の解答フォーム（Forms）は締切まで開放していたので、授業時間外に取り組んだ学生もいたと思われる。SNS 等を使って連絡をとり、わからないところを学生間で相談することもあったかもしれない。質問 2 の回答をみると、自分の力で調べて取り組んだと自己肯定的な回答（「とてもよくできた」「よくできた」）が 95%あった。難易度がそれほど高くなく（質問 3 の結果）、取り組みやすかったためでもあろう。課題の提出には、授業の理解だけでなくデバイスやアプリケーションソフトを使いこなすスキルも必要で、通常の試験とは異なる環境への対応力も必要であるが、質問 4 の結果をみるに、課題提出で学生たちが困難を感じることはなかったようだ。オンライン形式の課題や試験は、認知能力、ハードウェア・ソフトウェアの操作スキル、環境への適応感性を総合した ITリテラシーを高める有効な手段になりうる可能性があることをコロナ禍は副産物として我々に気づかせた。今後オンラインでの定期試験実施を実験的試行から始め、成果を検証しつつ段階的にその比率を高めていくプロセスについて議論すべき時期に来ていると考えている。

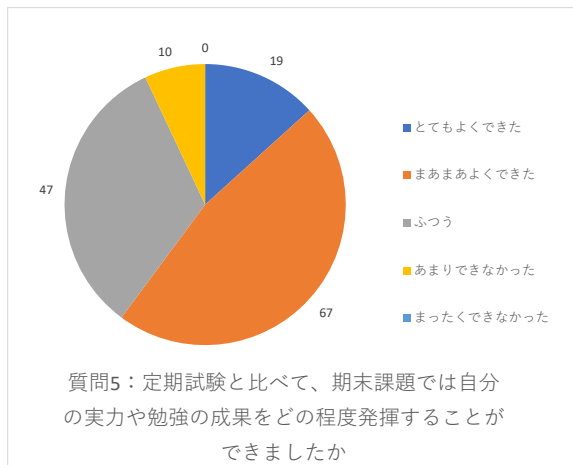
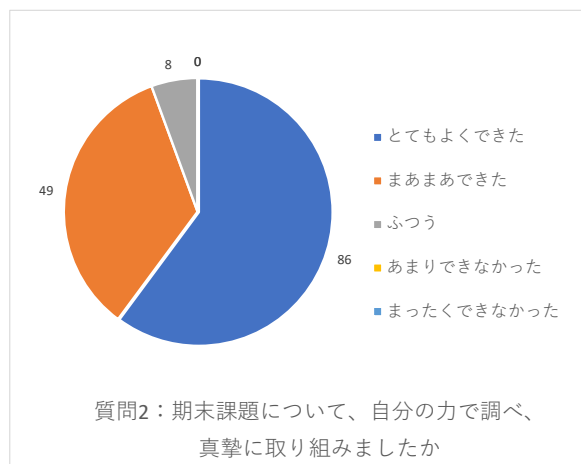
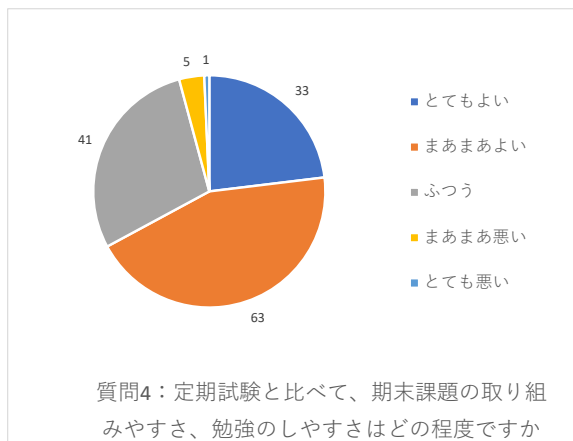
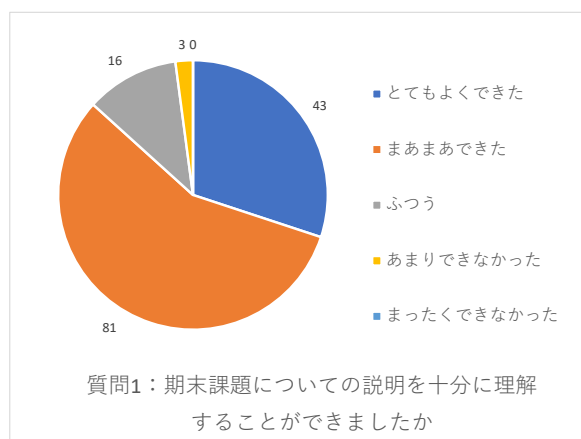
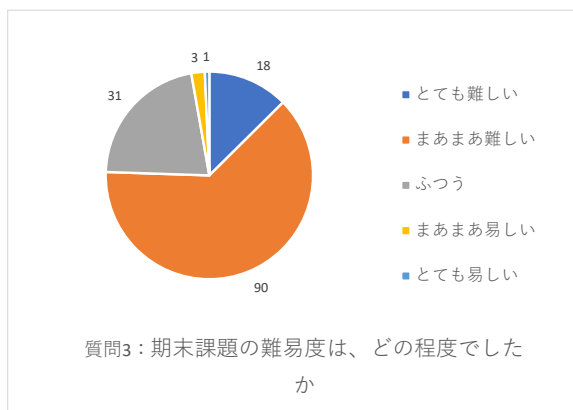
期末課題の平均点は 22 点（30 点満点）、得点率は 73% だった。通常の定期試験の平均点は 70 点前後（100 点満点）で、得点率はそれほど変わらなかった。質問 3 で、試験の難易度を「ふつう」と感じた学生が 23 人（61%）だったのは、得点率を反映しているのかもしれない。課題の問題は授業で板書した内容をノートで見返せば解ける難易度で難しくはないが、漢字や語彙、記号選択問題がなく、すべて記述形式の解答であったことに答えづらさを感じた学生は、「とても難しい」「まあまあ難しい」（12 人、32%）と感じたかもしれない。

質問 4 の結果は、オンライン上で完結する課題に対する学生の受容度を表している。否定的な回答（「まあまあ悪い」）は 2 人（5%）で、おおかたの学生は肯定的（「とてもよい」「まあまあよい」）か違和感を感じていない（「ふつう」）。質問 6 の結果からも、オンライン上での課題や試験の実施について、否定的（「あまり好ましくない」）な学生は 5 人（13%）で、肯定的（「とても好ましい」「好ましい」）合計 24 人・63%）か違和感を持っていない（「ふつう」9 人・24%）学生が多数であることがわかった。以上を踏まえると、このクラスでは、オンラインで課題や小テストの指示をしたり実施したりすることが違和感な

く受け入れられていると考えてよいようだ。紙資源の節約や教員の仕事の軽減の点からも、学生の学力を評価する最適な方法の検討を前提としつつ、漸進的にオンラインでの評価手段を増やしていくべき時期にきていると考えている。

### 4.3 廣瀬のアンケート結果

Fig.3 に廣瀬担当の1E・1C・1T・1Bのアンケート結果を示す。在籍者数162名のうち、回答者数は143名であった。アンケートはFormsのリンクをTeamsに添付する形で提示し、課題と同じ日時を回答期限とした。



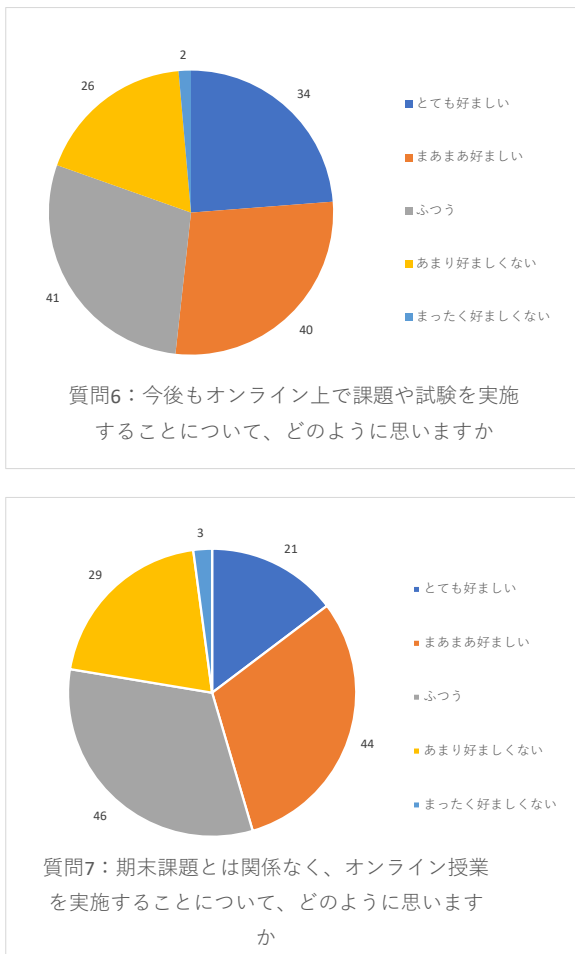


Fig.3 廣瀬担当 1E・1C・1T・1B のアンケート結果

まず質問1の結果から、87%の学生が「とてもよかったです」「まあまあできた」と回答し、課題の内容およびその指示を十分に理解できていたことが確認できる。これは、高橋のアンケート結果にもうかがえるように、デジタル機器に対する学生のリテラシーが、1年生とは言え、保証されていることによるものであろう。

次に課題の取り組みや課題の内容についての学生の評価について分析する。質問2の結果から、94%の学生が「とてもよかったです」「まあまあできた」と回答し、課題に真摯に取り組んだことがうかがえる。また質問3の結果から、76%の学生が「とても難しい」「まあまあ難しい」と回答し、難易度は決して低くないことが確認できる。多くが「難しい」と回答するような内容であるにもかかわらず学生が真摯に取り組むことができたのは、オンライン授業で説明を行い、また学生がその場で課題に取り組んだり、質問したりする時間を確保できたことに拠るところが大きいだろう。実際、アンケートの自由記述の項目では、「先生が授業でたくさんヒントを話してくださ

ったので、やりやすかったです」という意見が得られた。また、要約文や意見文の作成を課したことで、学生が改めて本文を丁寧に読み直し、自身の表現を模索したことが、学生自身の自己評価へとつながっていると考えられる。また自由記述の項目では、「定期試験に比べて問題数は少なかったけど、自分の力で考える問題が多くて大変でした」「本文や主張をきちんと理解出来ていないと難しい課題だったので少し苦戦したが、自分の文章力や読解力の成長に繋がったのではないと思う」「特に100字程度の要約が非常に難しく感じた。文字数に制限があると、しっかり内容の山場を理解していかないと適切に書けるかということに時間がかかった気がする。しかし、シンプルな文でどれだけ相手に伝えたいことを伝えられるかを考えるととても良い機会にもなった」「問題のほとんどが記述問題だったので、教科書の内容をじっくり読まなくてはならず、いつもより時間がかかった。しかし、そのおかげで、内容理解が深まった気がする」との意見も得られた。加えて、課題に取り組む時間を長めに設定したことや、学生が自由に取り組むことができる状況で課題に取り組んでもらったことで、「テスト期間が長めに設定されていることで問題と向き合う時間が多く、より文章の内容を理解出来たと思う」との意見も得られた。

最後に、通常の授業や定期試験との比較から見たオンラインの教育活動に対する学生の評価について分析する。質問4の結果から、96%の学生が「とてもよい」「まあまあよい」「ふつう」と回答し、通常の定期試験と同等かそれ以上の勉強のしやすさを学生が感じていることがうかがえる。また質問5の結果から、93%の学生が「とてもよかったです」「まあまあよかったです」「ふつう」と回答し、通常の定期試験と同等かそれ以上に自分の力を発揮できたとの感触を得たことが確認できる。そして質問6・7の結果から、オンライン授業およびオンライン上での課題提出について、おおよそ半数の学生（「とても好ましい」「まあまあ好ましい」が質問6は52%、質問7は46%）が今後もオンライン授業およびオンライン上での課題提出を求めることに好意的であったことがうかがえる。このことから、学生たちは1年次のオンラインでの教育活動に対応することができ、同時に肯定的な印象を得ていることが指摘できる。自由記述の項目でも、「学校でテストを実施する時より心に余裕ができてよかったです」「このような休業期間中でも自分なりの効果的な勉強法を見つけ、テストに挑むことができたと思います」等の評価が得られた。一方で、「あまり好ましくない」「まったく好



ましくない」と回答した学生が、質問6では18%、質問7では20%存在し、一定数の学生がオンラインでの教育活動に肯定的な評価を示しておらず、1年時のオンラインでの教育活動に対応できなかったことが指摘できる。自由記述の項目でも、「ちゃんとしたテストではないので気持ちが入らなかった」「ペーパーテストのほうが高得点をとれると感じた」「調べながら出来るので答えに自信がつく一方で、実力がついてないんじゃないかという不安が湧きました。個人的にはやはり対面のテストが楽です」との評価が得られた。

アンケートの結果より、学生はオンラインでの課題について、それぞれに学習の方法を見定め、教員が想定した読解力や表現力の向上に努めたと評価できる。学生自身の自己評価も概ね肯定的であり、学習効果も期待できると言えよう。このような学生の取り組みは平均点にも表れており(1E:75.6点、1C:81.9点、1T:74.7点、1B:81.4点)、総じて高水準である。今回の期末課題の結果は、学期中の対面・オンライン授業の内容を学生が理解し、発揮することができたことの表れと言えよう。

一方で、オンライン授業およびオンラインでの課題の実施に肯定的でない学生も少なからず存在することは認めなくてはならない。この問題は、例えばオンデマンド教材の充実や、より気軽に学生が質問できる環境の構築等、改善しなくてはならないところも大きい。また、やはり対面での授業や試験を望む学生が一定数存在することは事実であり、今後オンラインでの授業や課題を取り入れていく際も、十分配慮を要することは言うまでもない。

アンケートの結果、及び採点結果を参照すれば、学生の学習をオンラインの課題で評価することは可能であった(あるいは今後十分可能になる可能性がある)と言って良いだろう。しかし、今回の問題に偏りがあることは否定できず、例えば通常のテストで問うような漢字や語彙の問題は取り入れることができなかった。これはオンライン課題を準備するまでに十分な時間を得られなかったことや、学生が教科書・参考書等で自由に調べることができる環境にあること等、様々な要因があるものの、改善できる余地は大きい。例えば、Formsの設問の形式を活用し、ラジオボタンによる選択式の問題を増やすことも可能である。今後平素の教材や課題をオンラインで提示する際は、学生の学習状況や理解の程度を十分に評価できるよう、通常の授業やテストとの差があまり大きくなならない工夫が求められるとも言えよう。

## 5. 結語／課題と展望

### 5.1 課題

学生アンケートの結果から、オンラインによる国語の定期試験の課題と展望について総括してみたい。

まず課題であるが、オンラインでの定期試験の実施に対しては、学生が十分に納得して受けられる内容や体制を整えていく必要があるようだ。今回の調査では、オンラインで課題や試験を実施することに対し、1年生全体で33人(19%)が否定的(「あまり好ましくない」「まったく好ましくなり」)であり、5人にひとりという割合にのぼっている。今後否定的に捉える理由を精査し、その学生の比率を小さくする方策を探していくことが最大の課題といえよう。

アンケートでは、「オンライン授業を実施することについてどのように思うか」も聞いた(質問7)。1年生全体で、「とても好ましい」と「まあまあ好ましい」の回答が合わせて82人(46%)、「ふつう」が58人(33%)、「あまり好ましくない」と「まったく好ましくない」が合わせて38人(21%)だった。この質問でも5人にひとりがオンライン授業を否定的に捉えている。1年生は中学まで対面授業しか受けてこなかった学生も多く、Teamsを使った授業や課題の提出に不慣れな学生も多い。また、オンラインでのやりとりには、使用するデバイスや通信環境も大きく影響し、快適な環境を準備できる学生とそうでない学生とのあいだには大きな差も生まれる。今回は使用環境について調査しなかったが、デバイスの性能や通信環境が学生の学習意欲に影響を与えることが予想される。追加調査で学生の現状を明らかにし、この点への配慮を学校がどこまでできるか検討する必要がある。

教員側の問題としては、高橋・廣瀬とも、期末課題に漢字や語彙の問題を出題できなかった点が課題として残った。これに対しては、漢字や語句を筆記形式の小テストで評価し、学年末の総合成績に反映するなどして解決できそうだ。

### 5.2 展望

高橋・廣瀬ともに、Teamsは、授業、試験の連絡、プリントの配布、課題回収で日常的に使用しており、作業量軽減や紙資源の削減に大いに貢献している。学生にとっても、Teamsはチャット機能を使っていつでも教員に質問できるメリットがある。Teamsでできることは年々増えており、今後授業で電子デバイスを使用する機会は一層増えることになるだろう。

定期試験をオンラインで実施するにはまだ解決すべき課題が多いが、実施方法(試験時間・受験場所・使用器

具等) やオンライン形式にふさわしい問題を学校側が十分に検討し、学生がその必要性和妥当性について納得することができれば、現在福島高専で年に4回実施している定期試験のうちの1回をオンライン形式に変更することは、無理な構想ではないと思われる。それを可能にするためには、国語科の教員がIT技術にある程度精通することが求められる。「Word と Excel をひとつとおりに使いこなせば仕事が成り立つ」時代は、近い将来終焉を迎えることになるだろう。

それを見据え、高専間で情報交換や共同研究を進め、将来学校間で共通の出題プラットフォームや試験問題を共有する取り組みができないか、今後検討していきたい。

#### 注 釈

- 1) 国語科の科目のうち、3年生の「国語」、工学系4学科で開講する「日本語表現法」は演習科目の分類のため、中間試験を実施していない。
- 2) 高橋宏宣「令和3年度前期オンデマンド授業(国語)の課題と今後の展望」(福島工業高等専門学校『研究紀要』62, 2022.3, pp.143-149)で授業のデジタル化の可能性について言及した。

#### 謝 辞

本論は JSPS 科研費 JP21K02676 の助成を受けた成果の一部である。